

## 私の研究

### 羽仁新五のこと

玉井敬之

いま、私がさしあたって関心を抱いていることについて書いておきたい。昨年五月、大阪の友人から羽仁新五の遺稿集のようなものを出したいと思うので、協力をしてほしいという電話をもらった。羽仁新五という名を、私はこのときはじめて聞いたのではない。この人の名は恩師榊原美先生から何回も聞いていた。戦時中、石山徹郎の周囲に集まった近代文学研究者の一人として、また昭和十年前後に、岡崎義恵が提唱した「日本文学」の批判に参加し、いわゆる昭和十年代の、戦時下の苛酷な状況のなかで、石山徹郎、近藤忠義、永積安明等とともに、国文学界の歴史社会学派を形成する研究者として、知っていたのである。かつて私は石山徹郎、榊原美文の学問について考える機会があったが、そのときにはこの二人と近い関係にあった羽仁新五には注目していない。それは

石山徹郎の学問に焦点をあわせていたということもあったが、昭和十年代後半には東京に行ったらしい羽仁新五は、私の視野の外にあった。だから友人の電話に、今さら、という気がしないでもなかった。しかし、一応、協力することを約束した。

羽仁新五は、一九三三年早稲田大学を卒業した。しかし私はこの人の経歴と生活について、ほとんど知るところがない。一九四八年八月、疎開先の伊賀上野で没した。これからみてわかるように、羽仁新五は、昭和十年代に研究活動をはじめ、そして閉じた。私は十数篇の論文を集めることができたが、敗戦後に書かれたものは一篇だけである。

これらの、手許に集まった論文を読んでいて、次第に、今さら、という考えをあらためなければならなくなっていった。いざ羽仁新五の学問について考えてみるつもりだが、ここではあらっばい見通しだけを記しておく。

羽仁の論文は、伝統的国文学と「日本文学」批判、それに関連する古典の評価をめぐる方法的考察と、夏目漱石、志賀直哉、川端康成についての作家・作品論に大きく別けることができる。このうち川端康成について書かれたものが戦後のものである。方法的考察の諸論稿は犀利であって、石山徹郎の周辺ではきわだっていたのでは

ないだろうか。石山を中心とする大阪での近代文学研究者たちの動きや、昭和十年代後の学界の状況との関連で、羽仁のこの面での仕事の意味を考えてみたい。また繊細な感受性のひらめきがみられる作家・作品論は、歴史社会学派のなかでユニークな位置をしめることができると思う。そのうちの卒業論文をもとにしたと思われる漱石の初期の文学についての論は、私の長距離目標の研究対象でもある夏目漱石の研究と、当然、かわってくるであろう。志賀直哉論は、最近、有精堂の『志賀直哉Ⅱ』（日本文学研究資料叢書）に収められた。

疎開先の伊賀上野の羽仁新五の周囲には、たくさんの青年が集まり、地域の文化運動を推進していたといわれている。また、戦後の、大阪の民主主義文学運動にも大きな影響を与えているはずである。その辺のことについては、それにふさわしい人が記録してくれるであろう。

一九四八年十月、大阪商科大学（現大阪市立大学）道仁学舎の講堂で、羽仁新五追悼現代文学講演会が新日本文学会と日本文学協会の共催で行われた。このときの講師が誰と誰であったか、もう覚えていない。私の記憶に焼きついているのは、故人が愛唱したというインタンシヨナルを、神戸女学院の学生たちが祭壇の前で合唱している姿である。

（日本文学部教授）